

写真図版50 繩文時代早期遺物包含層出土石器⑥

第Ⅲ章 アカホヤ火山灰層上面の調査

第1節 掘立柱建物跡

アカホヤ火山灰層上面にて古代の掘立柱建物跡6棟を検出した。建物跡は調査区の中央の東側にて1棟、南東部にて5棟が検出されている。すべての建物跡は調査区の西側から東側に下る斜面の傾斜が緩やかになるところに立地している。いくつかの建物跡は切り合い関係にありすべての建物が同時に存在していたものではない。

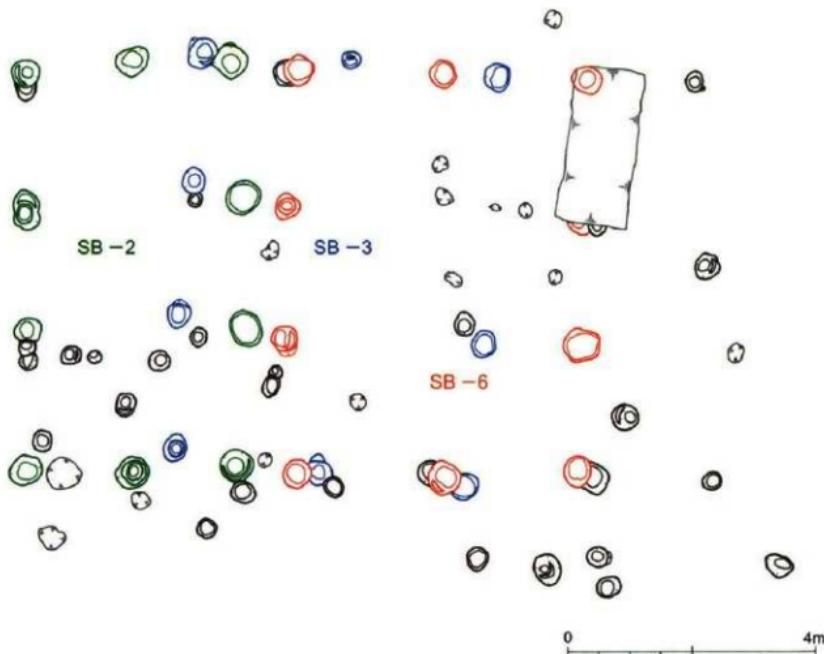
建物跡はすべて梁行2間×桁行3間のもので、長軸方向を北西～南東に向けるものと北東～南西に向けるものとが見られる。どの建物跡も桁行きは概ね6.5mだが梁行については3.5m前後のものと4.5m前後のものとが見られ、その梁行の長さの違いにより床面積が約23m²のもの（1類）と約29m²のもの（2類）に分類される。

SB-1

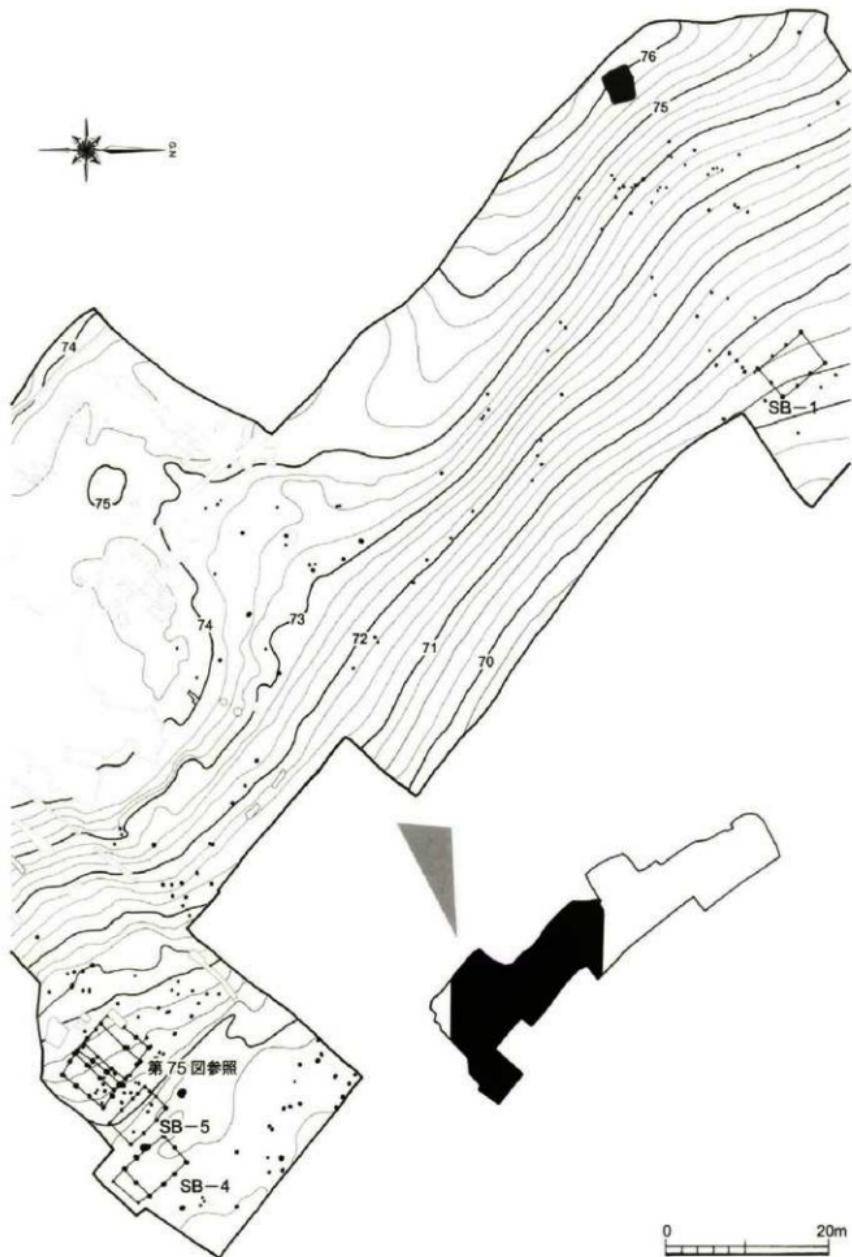
調査区中央部の東側で単独で検出された。長軸方向は北西～南東に向ける。規模は2類で検出面における柱穴の直径は40cm～44cmで深さは18cm～64cmを測る。柱穴からの出土遺物は確認されなかった。

SB-2

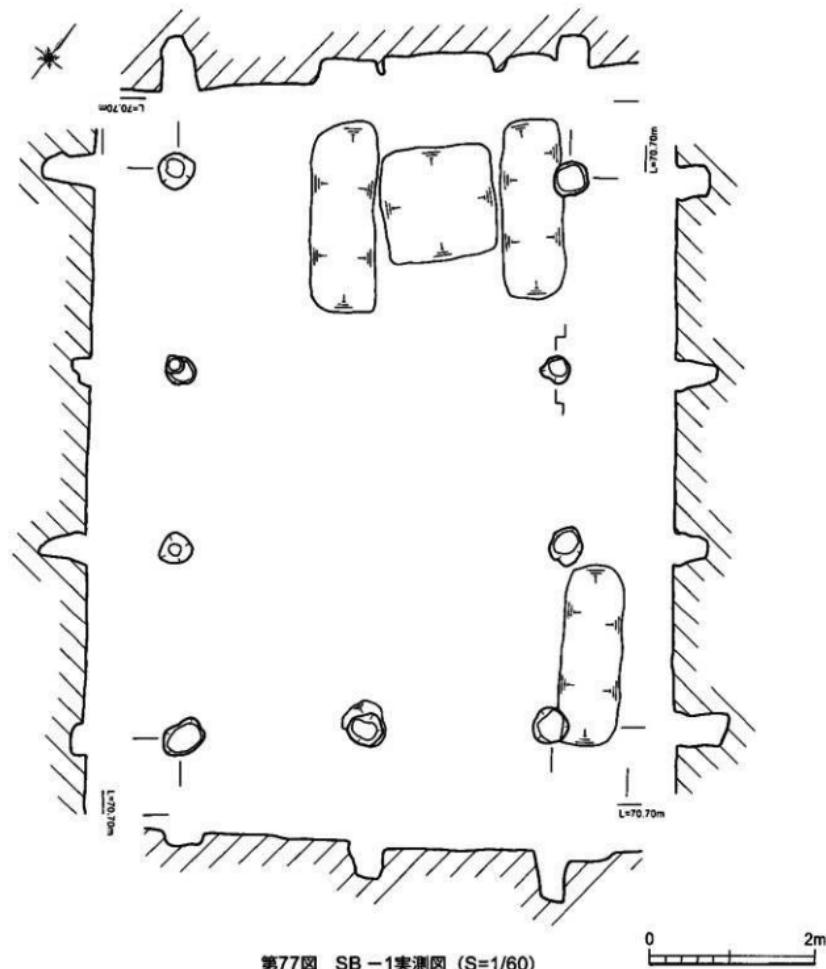
調査区南東部にて検出され、SB-3と切り合い関係にある。長軸方向は北東～南西に向ける。柱穴同士の重なり合いはほとんどなくその前後関係は不明である。規模は1類で検出面における柱穴の直径は50cm～54cmで深さは40cm～100cmを測る。柱穴の埋土中からは布痕土器や土師器壺、内黒の黒色土器、管状土錐が出土している。



第75図 SB-2・3・6配置図 (S=1/80)



第76図 古代据立柱建物跡配置図 (S=1/600)



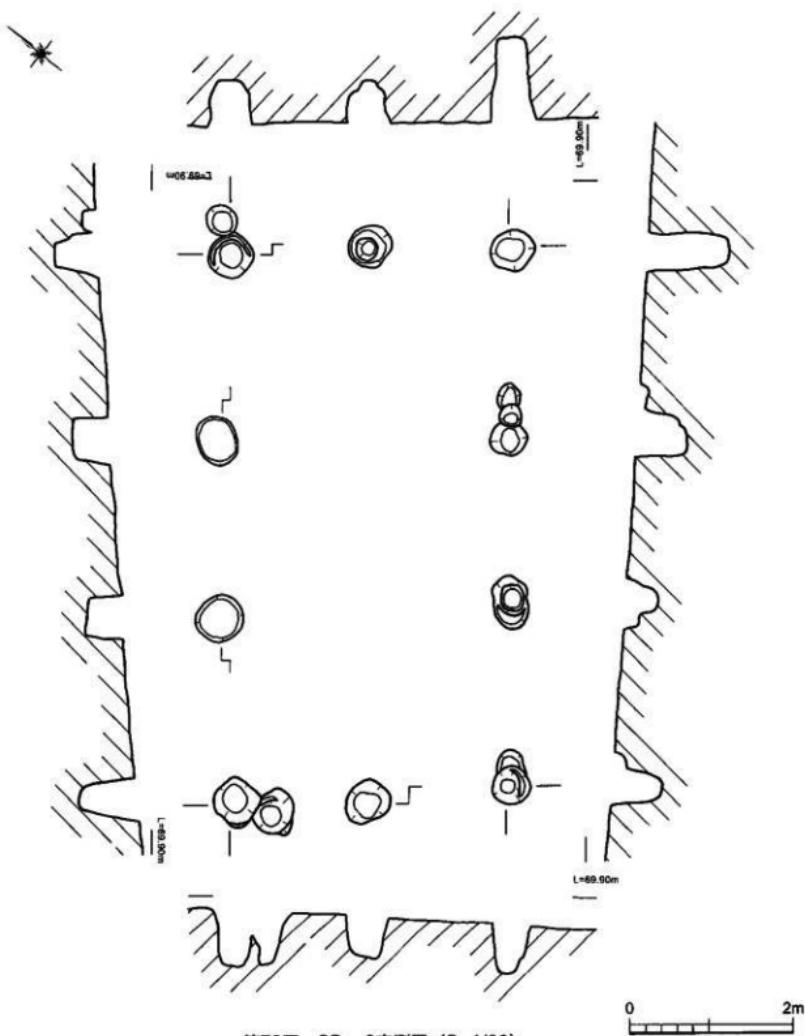
第77図 SB-1実測図 (S=1/60)

SB-3

調査区南東部にて検出され、SB-2・6と切り合い関係にある。長軸方向は北東～南西に向ける。前述のとおりSB-2との切り合い関係は不明だが、SB-6の柱穴とはいくつか重なり合っており、その切り合い関係を検討するとSB-6に切られているようである。規模は2類で検出面における柱穴の直径は32cm～54cmで深さは26cm～76cmを測る。柱穴の埋土中からは布痕土器や土師器が出土している。

SB-4

調査区南東部にて検出され、SB-5の南東に位置する。長軸方向は北西～南東に向ける。長軸の南東方向に底が付随する。規模は2類で検出面における柱穴の直径は38cm～50cmで深さは32cm～90cmを測る。柱穴の埋土中

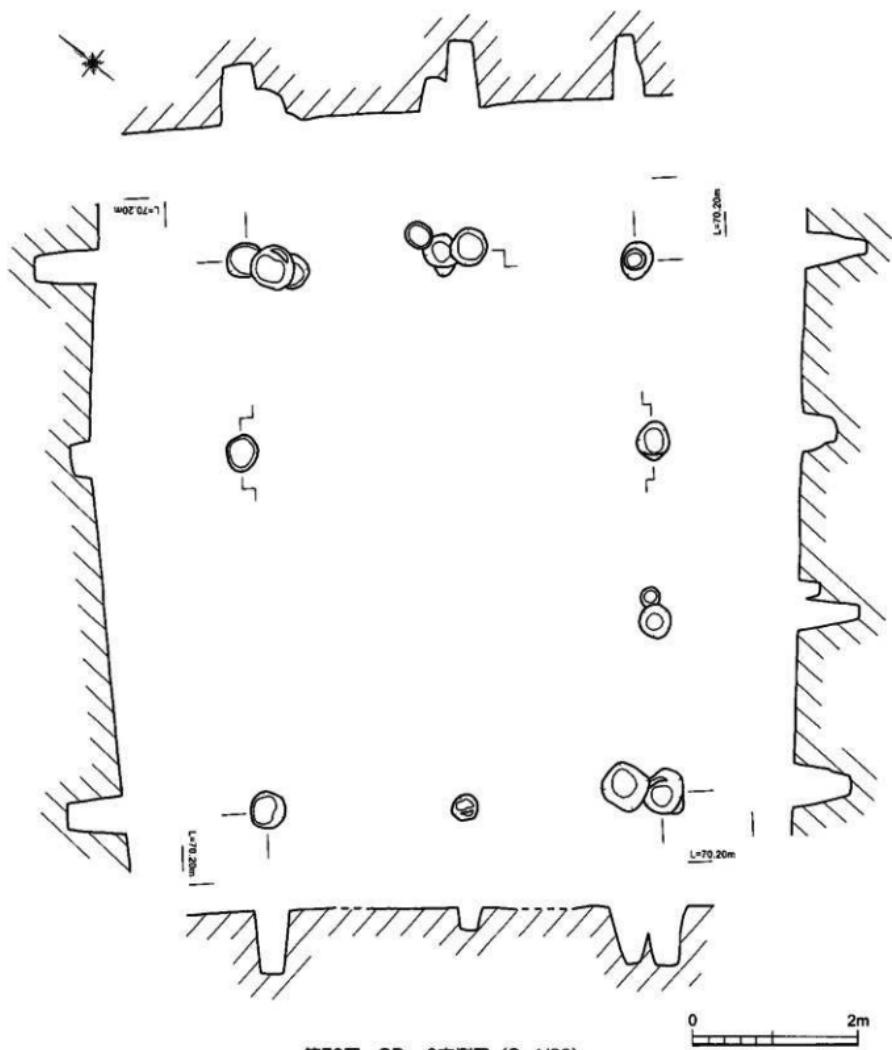


第78図 SB-2実測図 (S=1/60)

からは布痕土器や土師器坏が出土している。

SB-5

調査区南東部にて検出され、SB-2・3・6の南東に位置する。長軸方向は北西～南東に向ける。規模は1類で検出面における柱穴の直径は24cm～50cmで深さは22cm～60cmを測る。柱穴の埋土中からは布痕土器や土師器

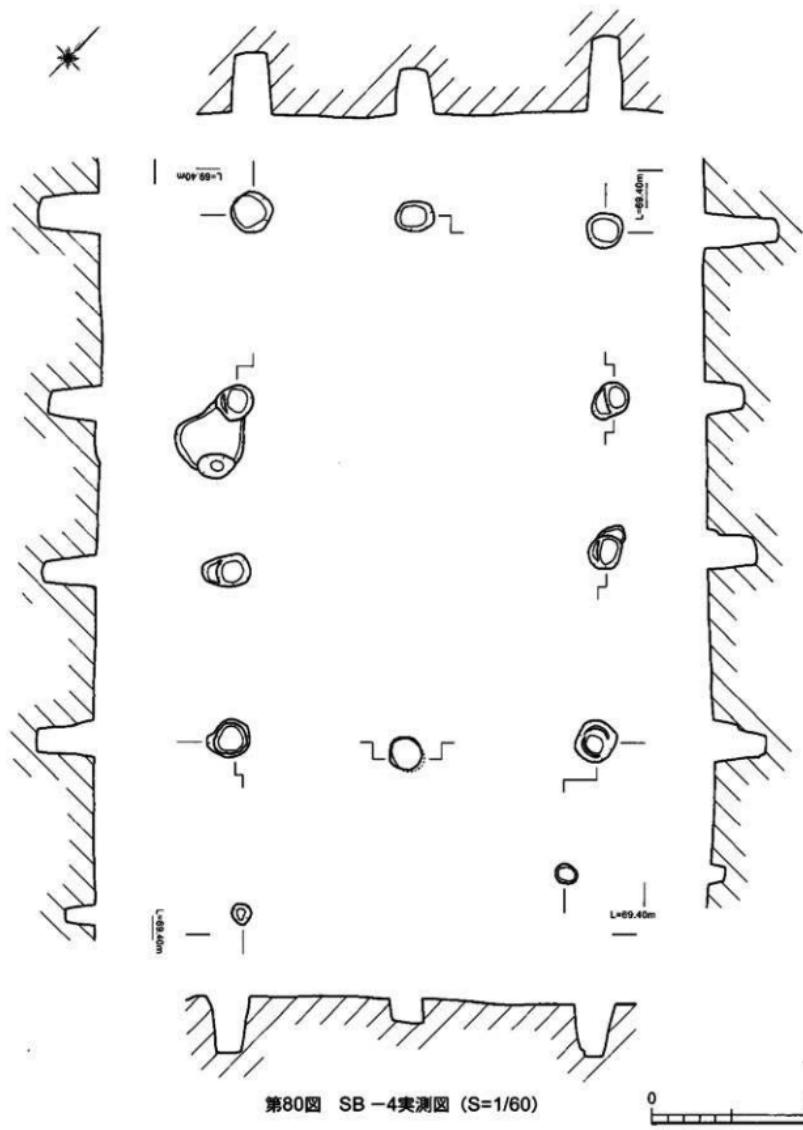


第79図 SB-3実測図 (S=1/60)

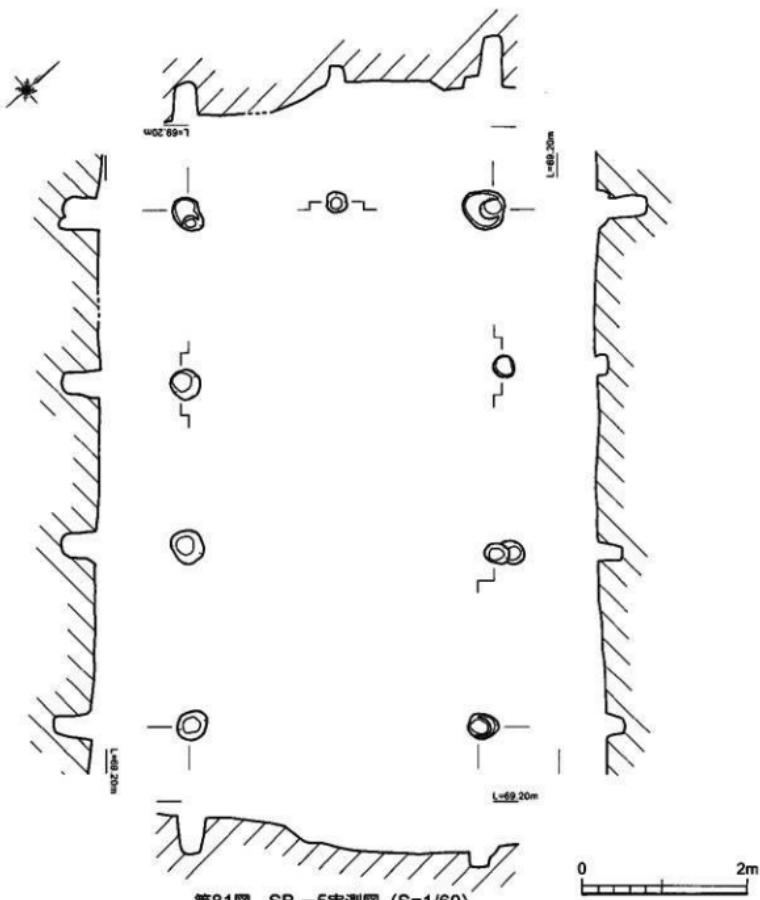
壺が出土している。

SB-6

調査区南東部にて検出され、SB-3と切り合い関係にあり、前述のとおりSB-3を切っている。長軸方向は北東～南西に向ける。規模は2類で検出面における柱穴の直径は38cm～50cmで深さは20cm～80cmを測る。柱穴の埋土中からは布痕土器や土器器壺が出土している。



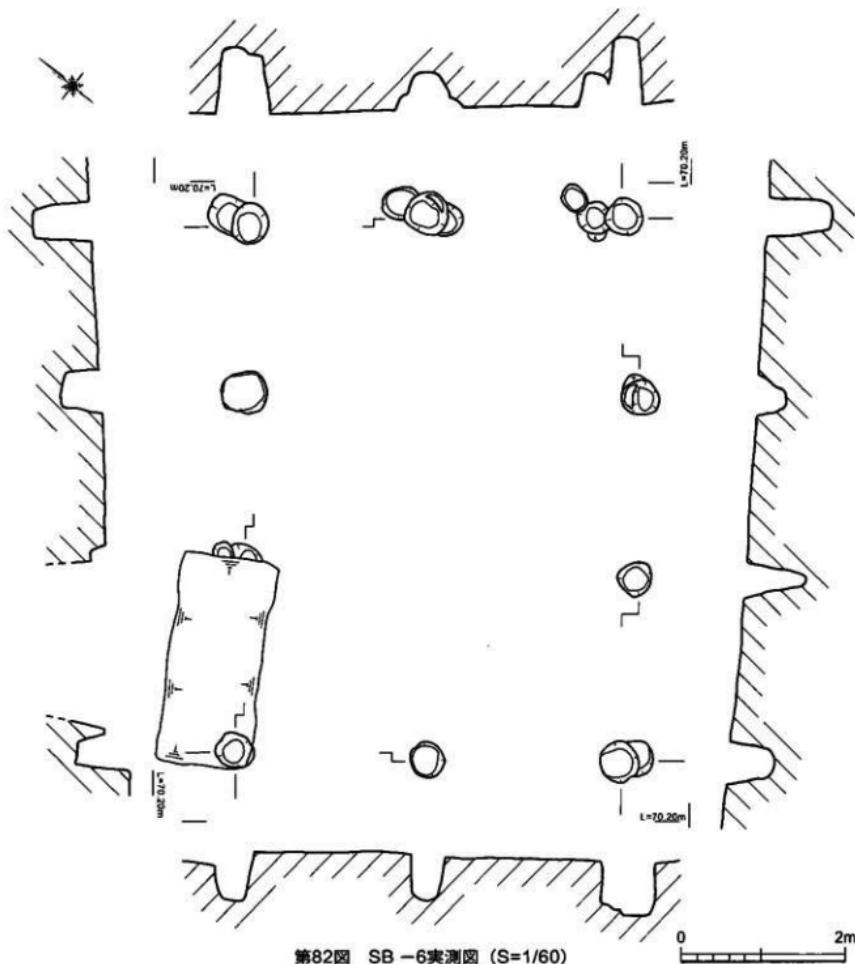
第80図 SB-4実測図 ($S=1/60$)



第81図 SB-5実測図 (S=1/60)

第10表 古代掘立柱建物跡出土土器観察表①

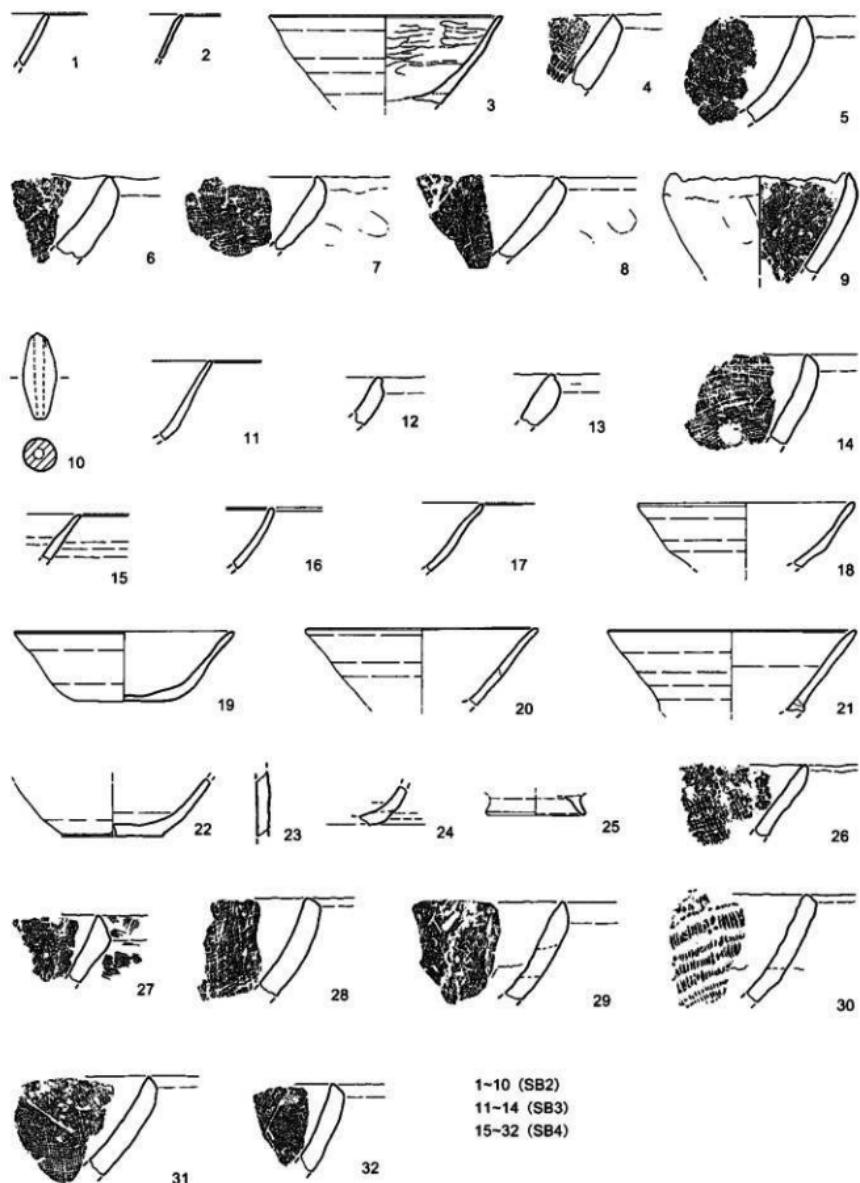
報告 No	出土 位置	器種	残存 部位	文様及び調整		色調		法量(cm)			備考	実測 No
				外面	内面	外面	内面	口径	底径	器高		
1	SB2	土器器环	口縁～ 胴部	回転ナデ	回転ナデ	25YR6/6橙	5YR6/6 橙					495
2	SB2	瓦器坏	口縁～ 胴部	回転横ナデ	回転横ナデ	10YR4/1 褐灰	10YR5/1 褐灰					494
3	SB2	黑色土器 塊	口縁～ 胴部	回転横ナデ	ヘラミガキ にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙	N3/0 にぶい黄	(14.0)			反転復元、内面黒色光沢あり	547
4	SB2	布痕土器	口縁～ 胴部	ナデ	布痕あり	7.5YR6/4 にぶい橙	5YR6/3 にぶい橙					490
5	SB2	布痕土器	口縁～ 胴部	ナデ	布痕あり	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙					493
6	SB2	布痕土器	口縁～ 胴部	ナデ	布痕あり	7.5YR6/4 にぶい橙	5YR6/6 橙					497
7	SB2	布痕土器	口縁～ 胴部	ナデ、 指痕あり	布痕あり	5YR6/6 橙	7.5YR5/4 にぶい褐					496
8	SB2	布痕土器	口縁～ 胴部	ナデ	布痕あり	5YR6/6 橙	2.5YR6/6 橙					492
9	SB2	布痕土器	口縁～ 胴部	ナデ、 唇痕あり	布痕あり	2.5YR5/3 にぶい赤褐	2.5YR4/3 にぶい赤褐	(10.6)			反転復元	491



第82図 SB-6実測図 (S=1/60)

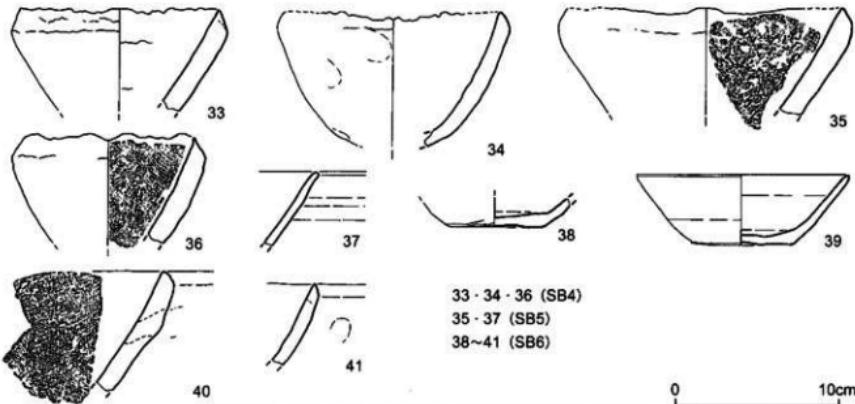
第11表 古代掘立柱建物跡出土土器観察表②

報告 No	出土 位置	器種	我在 部位	文様及び調整		色調			法長(cm)	口径	底径	器高	備考	実測 No	
				外面	内面	外面	内面								
11	SB3	土師器	口縁~ 肩部	風化の為 不明瞭	回転横ナデ	7.5YR7/4 に近い橙	7.5YR7/4 に近い橙								498
12	SB3	布直土器	口縁~ 肩部	ナデ	風化の為 不明瞭	5YR6/6 橙	5YR5/6 明赤鈍								501
13	SB3	布直土器	口縁~ 肩部	ナデ	風化の為 不明瞭	5YR6/4 に近い橙	25YR5/6 明赤鈍								499
14	SB3	布直土器	口縁~ 肩部	ナデ	布直あり	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙								500
15	SB4	土師器坏	口縁~ 肩部	回転横ナデ	回転横ナデ	7.5YR7/4 に近い橙	10YR6/4 に近い黄橙								506
16	SB4	土師器坏	口縁~ 肩部	回転ナデ	回転ナデ	7.5YR6/4 に近い橙	10YR6/4 に近い黄橙								504
17	SB4	土師器坏	口縁~ 肩部	回転横ナデ	回転横ナデ	25YR6/6 橙	25YR5/6 明赤鈍								502



第83図 古代据立柱建物跡出土土器実測図① (S=1/3)





第84図 古代掘立柱建設跡出土土器実測図② (S=1/3)

第12表 古代掘立柱建物跡出土土器観察表③

報告 No	出土 位置	器種	残存 部位	文様及び調査		色調	法盤(cm)			備考	実測 No	
				外面	内面		外面	内面	口径	底径		
18	SB4	土師器环	口縁~ 胴部	目線ナデ	目転ナデ	5YR6/5 澄	5YR6/5 澄	(12.8)			反転復元	508
19	SB4	土師器环	口縁~ 底部	目線ナデ 回転ヘラ切り	回転ナデ 回転ヘラ切り	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙	(13.1)	4.1	(6.0)	反転復元	517
20	SB4	土師器环	口縁~ 胴部	目線ナデ	目転ナデ	75YR6/4 にぶい澄	75YR6/4 にぶい澄	(13.7)			反転復元	503
21	SB4	土師器碗	口縁~ 胴部	目線ナデ	目転ナデ	75YR5/4 にぶい澄	75YR5/4 にぶい澄	(15.0)			反転復元	519
22	SB4	土師器环	胴~ 底部	回転ナデ ヘラ削 回転ヘラ切り	回転ナデ	75YR6/4 にぶい澄	75YR6/3 にぶい澄	(6.1)			反転復元、スス付着	537
23	SB4	瓦質土器	不明	回転横ナデ	回転横ナデ	10R5/1 赤灰	10YR7/2 にぶい黄橙					507
24	SB4	土師器环	胴~ 底部	回転横ナデ 回転ヘラ切り	回転横ナデ	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙					539
25	SB4	土師器 高台付环	脚部	回転横ナデ	回転横ナデ	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙	(5.7)			反転復元	505
26	SB4	布痕土器	口縁~ 胴部	ナデ	布痕あり	75YR5/4 にぶい澄	75YR5/4 にぶい澄					514
27	SB4	布痕土器	口縁~ 胴部	ナデ	布痕あり	75YR6/4 にぶい澄	75YR5/4 にぶい澄					511
28	SB4	布痕土器	口縁~ 胴部	ナデ	布痕あり	5YR6/6 澄	75YR6/4 にぶい澄					513
29	SB4	布痕土器	口縁~ 胴部	ナデ	ナデ	75YR6/4 にぶい澄	75YR5/4 にぶい澄					516
30	SB4	布痕土器	口縁~ 胴部	風化のみ不明瞭 ナデ	布痕あり	75YR6/4 にぶい澄	75YR6/4 にぶい澄					509
31	SB4	布痕土器	口縁~ 胴部	ナデ	布痕あり	75YR6/4 にぶい澄	75YR6/4 にぶい澄					515
32	SB4	布痕土器	口縁~ 胴部	ナデ	布痕あり	5YR6/4 澄	75YR6/4 にぶい澄					512
33	SB4	布痕土器	口縁~ 胴部	ナデ	風化のみ 異常不明	5YR6/4 にぶい澄	75YR5/4 にぶい澄	(12.0)			反転復元	520
34	SB4	布痕土器	口縁~ 胴部	ナデ, 指頭痕あり	風化のみ 不明瞭	5YR6/6 澄	75YR5/4 にぶい澄	(12.9)			反転復元	518
35	SB5	布痕土器	口縁~ 胴部	ナデ	布痕あり	75YR6/4 にぶい澄	75YR6/4 にぶい澄	(16.2)			反転復元	521
36	SB4	布痕土器	口縁~ 胴部	ナデ	布痕あり	5YR6/6 澄	75YR5/4 にぶい澄	(10.2)			反転復元	510
37	SB5	土師器环	口縁~ 胴部	回転横ナデ	回転横ナデ	75YR6/4 にぶい澄	75YR6/4 にぶい澄					522
38	SB6	土師器环	胴~ 底部	回転ナデ 回転ヘラナデ	回転横ナデ	5YR5/6 明赤陶	75YR5/4 にぶい澄		5.5		スス付着	546
39	SB6	土師器环	完形	回転ナデ 回転ヘラ切り	回転ナデ	75YR6/4 にぶい澄	75YR6/4 にぶい澄	(12.8)	4.2	6.1	反転復元	538
40	SB6	布痕土器	口縁~ 胴部	ナデ	布痕あり	75YR6/4 にぶい澄	75YR5/4 にぶい澄					524
41	SB6	布痕土器	口縁~ 胴部	ナデ, 指頭痕あり	風化のみ 不明瞭	75YR5/4 にぶい澄	75YR5/4 にぶい澄					523

第2節 壇穴式住居跡

アカホヤ火山灰層上面にて弥生時代の壇穴式住居跡が5軒検出された。そのうちの1軒は調査区中央部より南側にて残存する西側から東側へ下る斜面のほぼ頂上に立地している。他の住居跡は著しく削平を受けている調査区中央のやや北側で検出された。その区域の旧地形はやはり西側から東側へ下る緩斜面が考えられ、住居跡はその斜面の頂上よりやや低い位置に立地していたものと考えられる。

SA-1

調査区中央の斜面の頂上付近にて単独で検出された。北東部は大きく削平を受けている。長軸4.03m、短軸3.62mの不整長方形プランの壇穴式住居跡で長軸方向は西～東を向いている。床面には4本の柱穴が確認され、北側の壁際には1本の柱穴、南側の壁際には不整方形の土坑が付随している。床面の柱穴についてはその配置状況から4本すべてを同時に使用していたものではないと考えられる。炉跡は検出されていない。柱穴の直径は20cm～41cmで深さは20cm～55cmを呈する。埋土中からは中構式の壺の破片、壺の底部片、短頸壺の頸部片、無頸壺が出土し、床面からは石皿が出土している。

SA-2

調査区中央よりやや北側の東端で検出され、SA-3と切り合い関係にある。床面の掘り込みは削平を受けており、柱穴だけが検出された状況あった。4本の柱穴が一辺1.9m×1.8mの方形に配置され、その内側に2本の柱穴が見られる。SA-3との柱穴同士の重なり合いではなくその前後関係は不明である。検出面における柱穴の直径は26cm～36cmで深さは18cm～34cmを測る。柱穴からは弥生土器片が出土したが図化に耐えうる資料はなかった。

SA-3

調査区中央よりやや北側の東端で検出され、SA-2と切り合い関係にある。床面の掘り込みは削平を受けており、柱穴だけが検出された状況あった。7本の柱穴が直径4.1mの円形に配置され、その中央付近に2本の柱穴が見られる。円形に配置される7本の柱穴は2基～4基の切り合い関係にあるものが複数みられ、柱の立替がおこなわれた可能性が考えられる。検出面における柱穴の直径は32cm～42cmで深さは18cm～44cmを測る。柱穴からは弥生土器片が出土したが図化に耐えうる資料はなかった。

SA-4

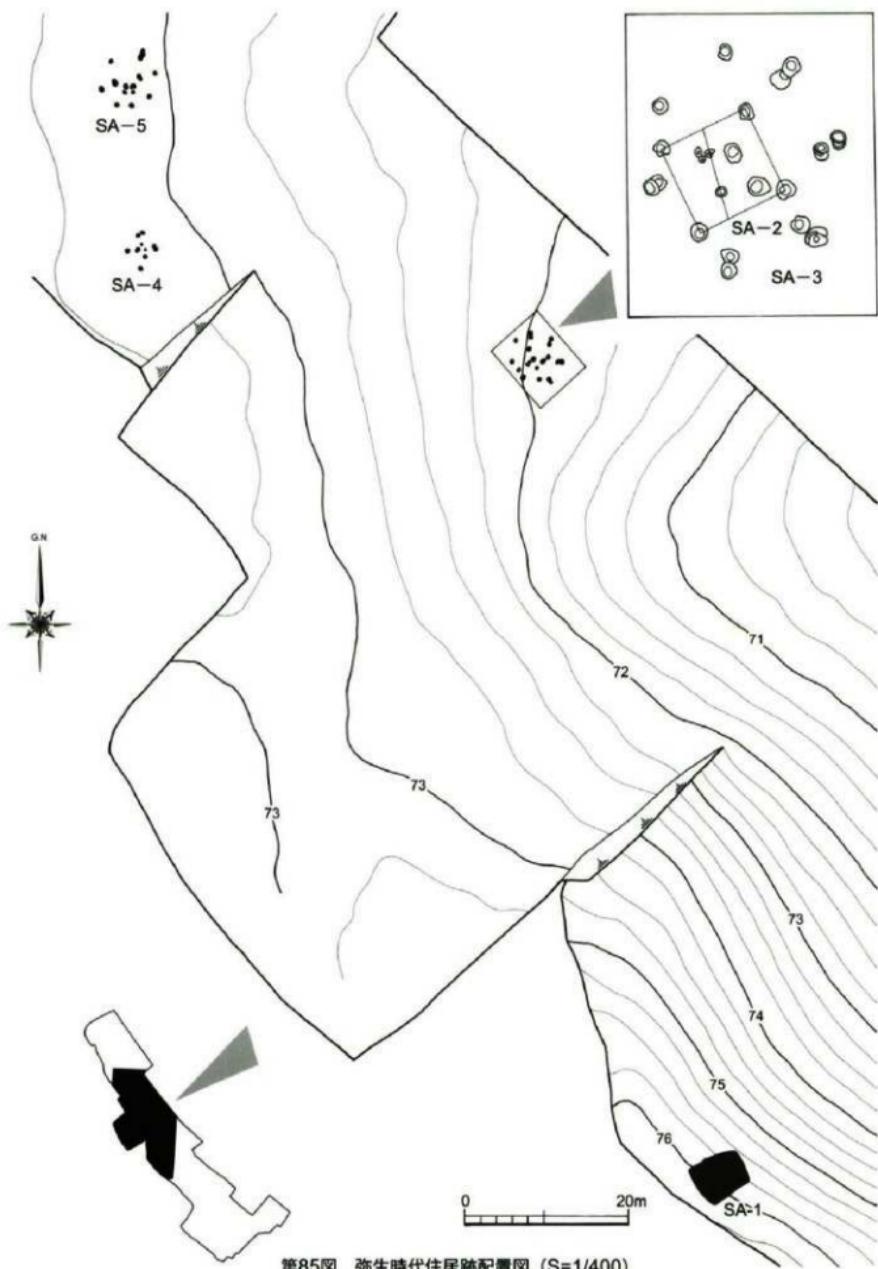
調査区中央よりやや北側の西端で検出された。床面の掘り込みは削平を受けており、柱穴だけが検出された状況あった。4本の柱穴が一辺1.9m×1.7mの不整方形に配置され、その中央付近に4本の柱穴が見られる。SA-2と類似するような形態である。方形に区画される柱穴に切り合い関係にあるものが見られる点、切り合い関係のない柱穴の近くには別の柱穴が見られることなどから柱の立替がおこなわれた可能性が考えられる。検出面における柱穴の直径は18cm～40cmで深さは33cm～55cmを測る。柱穴からは弥生土器片が出土したが図化に耐えうる資料はなかった。

SA-5

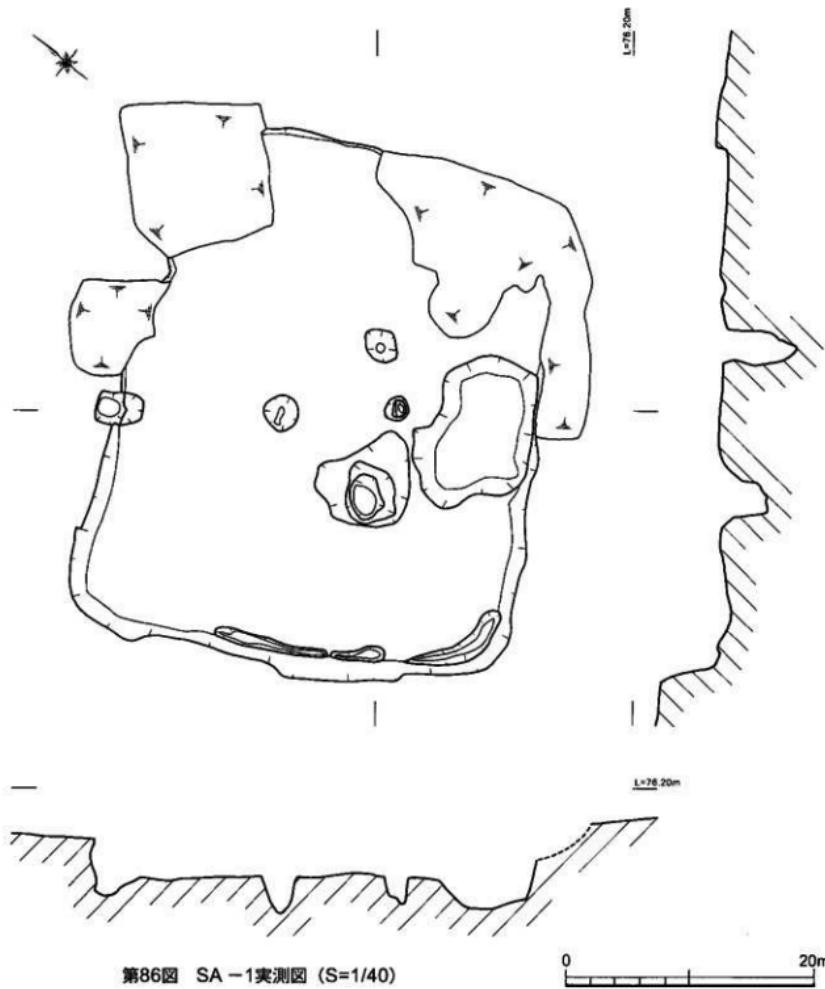
調査区中央よりやや北側で検出されSA-4の北側に位置する。床面の掘り込みは削平を受けており、柱穴だけが検出された状況あった。7本の柱穴が直径4.5mの円形に配置され、その中央付近に7本の柱穴が見られる。円形に巡る柱穴が切り合い関係にあるものが見られる点などを考慮すると柱の立替がおこなわれた可能性が考えられる。検出面における柱穴の直径は26cm～50cmで深さは26cm～56cmを測る。柱穴からは連続刺突文の施された壺の口縁部片、脚台付壺の底部片などが出土している。

第3節 アカホヤ火山灰層上面調査出土遺物

掘立柱建物跡や壇穴式住居跡に関係しない柱穴や擾乱跡などから須恵器片や土師器片、弥生土器片などが出土している。その一部の報告をここで行う。その詳細については観察表を参照していただきたい。



第85図 弥生時代住居跡配置図 (S=1/400)

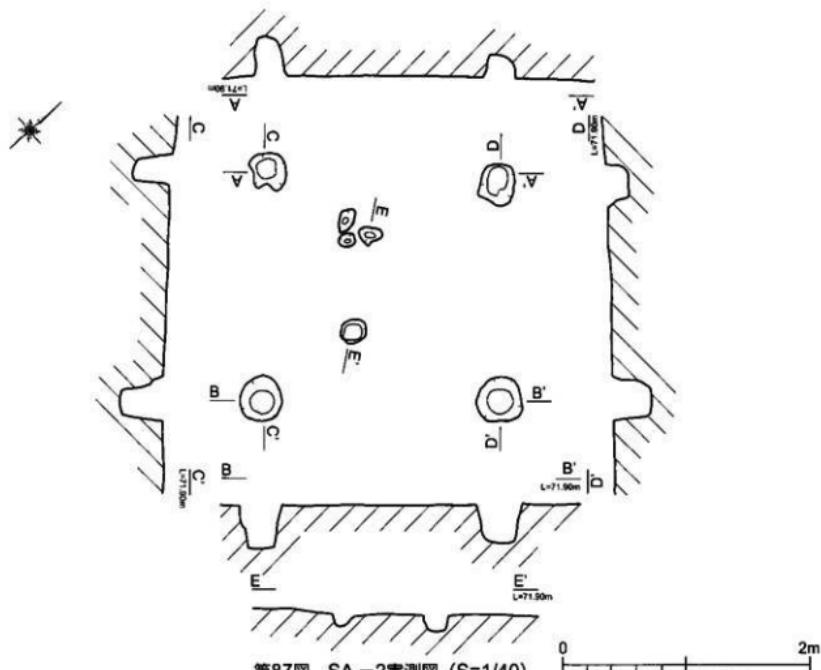


第86図 SA-1実測図 (S=1/40)

第13表 アカホヤ火山灰層上面調査出土石器・土製品計測分類表

報告書 No.	実測 No.	器種	出土地点	層位	石材	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	備考
48	419	石皿	SA1		砂岩	26.0	16.3	7.5	4000	
10	489	土製品・土錐	SB2			5.1	2.0	1.9	13.9	
68	531	土製品・土錐	A7	V		3.4	1.8	1.6	9.6	
69	18	土製品・土錐		V		(4.0)	1.5	1.6	8.9	下部欠損

() の値は残存値を示す



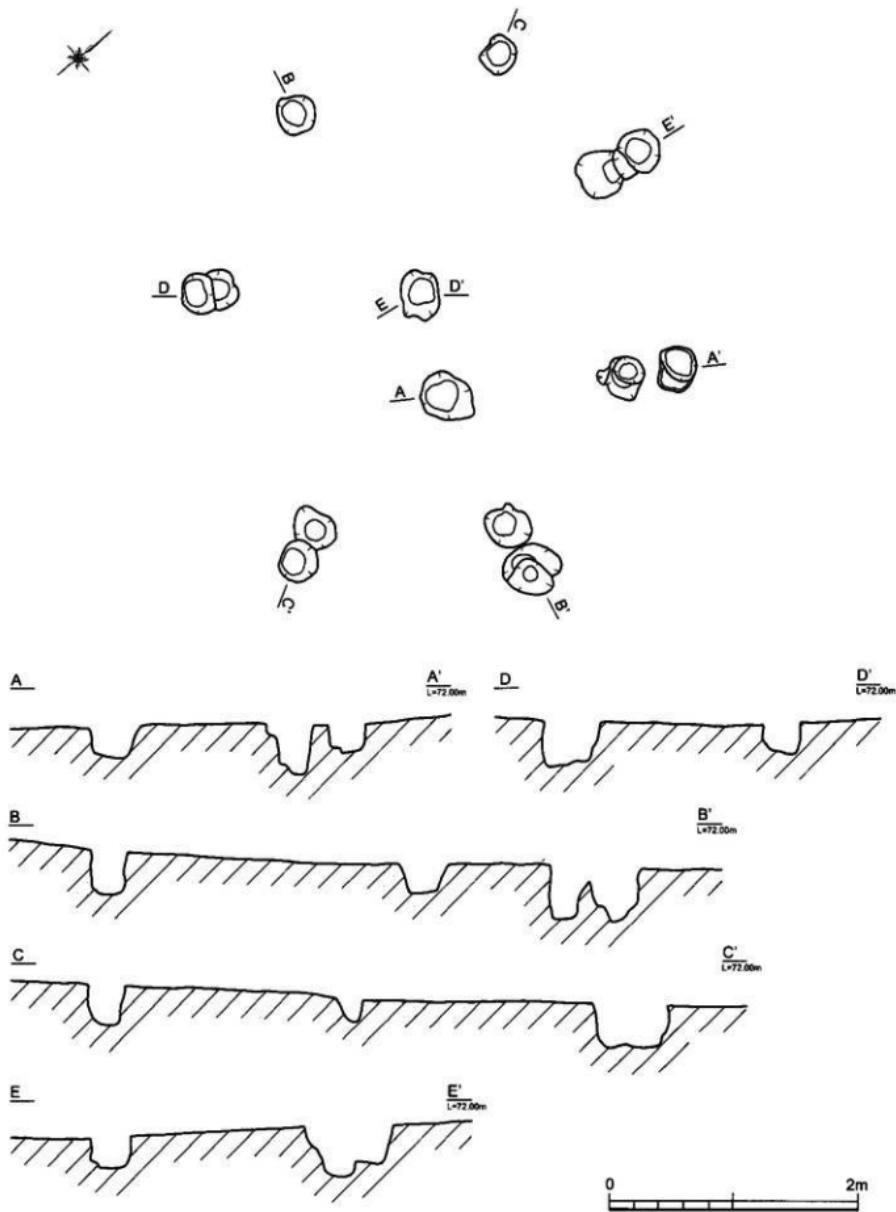
第87図 SA-2実測図 (S=1/40)

第14表 弥生時代住居跡出土土器観察表

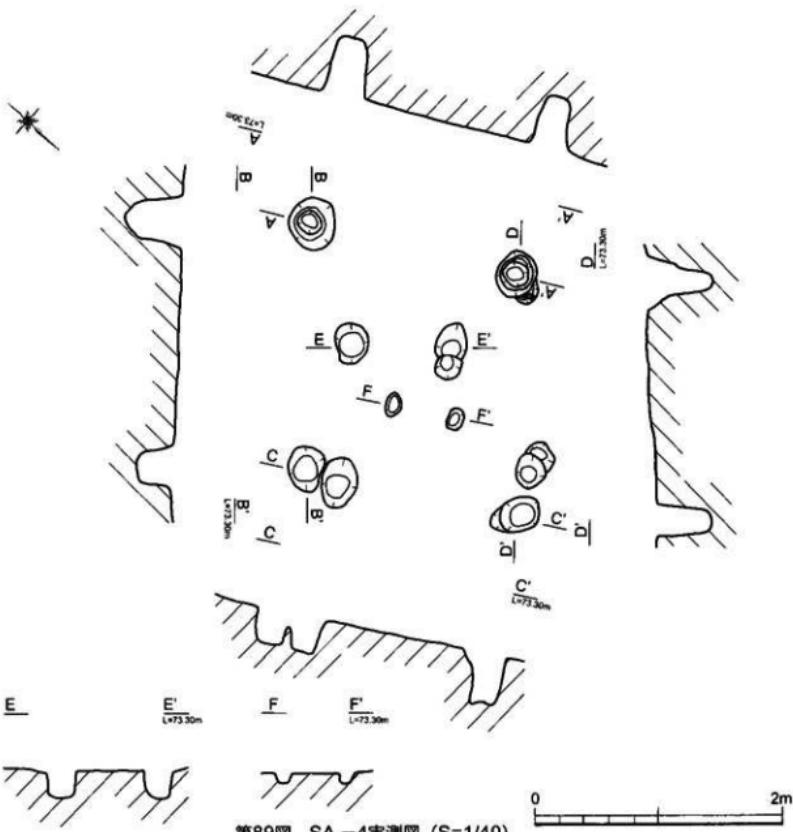
番号 No.	出土 位置	器種	残存 部位	文様及び調整		色調			法量(cm)			参考	実測 No.
				外面	内面	外面	内面	口径	底径	器高			
42	SA1	弥生土器 壺	口縁部	横ナデ	横ナデ	10YR7/3 にぶい黄緑	10YR6/3 にぶい黄緑						9
43	SA1	弥生土器 壺	胴部	横ナデ 輪状模様(けいじゆう)	ナデ	10YR5/3 にぶい黄緑	75YR6/4 にぶい橙					スス付着	10
44	SA1	弥生土器 壺	口縁部	ナデ	ナデ	10YR6/3 にぶい黄緑	75YR7/4 にぶい橙						548
45	SA1	弥生土器 壺	胴～ 底部	ミガキ ナデ	ミガキ ナデ	10YR4/1 褐灰	10YR4/1 褐灰	(6.4)				反転復元	8
46	SA1	弥生土器 壺	口縁～ 胴部	横ナデ、 ミガキ	ナデ	10YR5/4 にぶい黄緑	75YR5/4 にぶい褐					穿孔あり	11
47	SA1	弥生土器 壺	完全	ナデ、 指痕あり	ナデ、 指痕あり	75YR6/4 にぶい橙	75YR6/4 にぶい橙	(9.8)	3.9	9.7		反転復元	20
49	SA1	弥生土器 壺	口縁～ 胴部	横ナデ 輪状模様(けいじゆう)	ハケの後 ナデ	75YR5/3 にぶい褐	75YR5/3 にぶい褐					スス付着	543
50	SA5	弥生土器 壺	胴～ 底部	ナデ	ナデ	10YR4/3 にぶい黄緑	75YR4/2 褐灰	(4.6)				反転復元	544
51	SA5	弥生土器 壺	口縁部	横ナデ 特殊工具 による追加文	横ナデ	75YR5/4 にぶい褐	75YR5/3 にぶい褐						545

第15表 アカホヤ火山灰層上面調査出土土器観察表①

番号 No.	出土 位置	器種	残存 部位	文様及び調整		色調			法量(cm)			参考	実測 No.
				外面	内面	外面	内面	口径	底径	器高			
52	DPI	布痕土器	底部	ナデ	ナデ	25YR6/6 橙	25YR4/4 にぶい赤褐						530
53	DP2	土師器	口縁～ 胴部	回転横ナデ	回転横ナデ	75YR6/4 にぶい橙	75YR6/4 にぶい橙	(13.9)				反転復元	526
54	DP20	土師器	口縁～ 胴部	回転横ナデ	回転横ナデ	75YR6/4 にぶい橙	10YR5/3 にぶい黄緑					スス付着	529
55	DP20	布痕土器	口縁～ 胴部	ナデ	布痕あり	5YR6/4 にぶい橙	5YR5/4 にぶい赤褐						527
56	DP27	布痕土器	口縁部	ナデ	ナデ	5YR6/6 橙	5YR5/6 明赤褐						525
57		土師器	口縁部	回転横ナデ	回転横ナデ	75YR6/4 にぶい橙	75YR6/4 にぶい橙						15



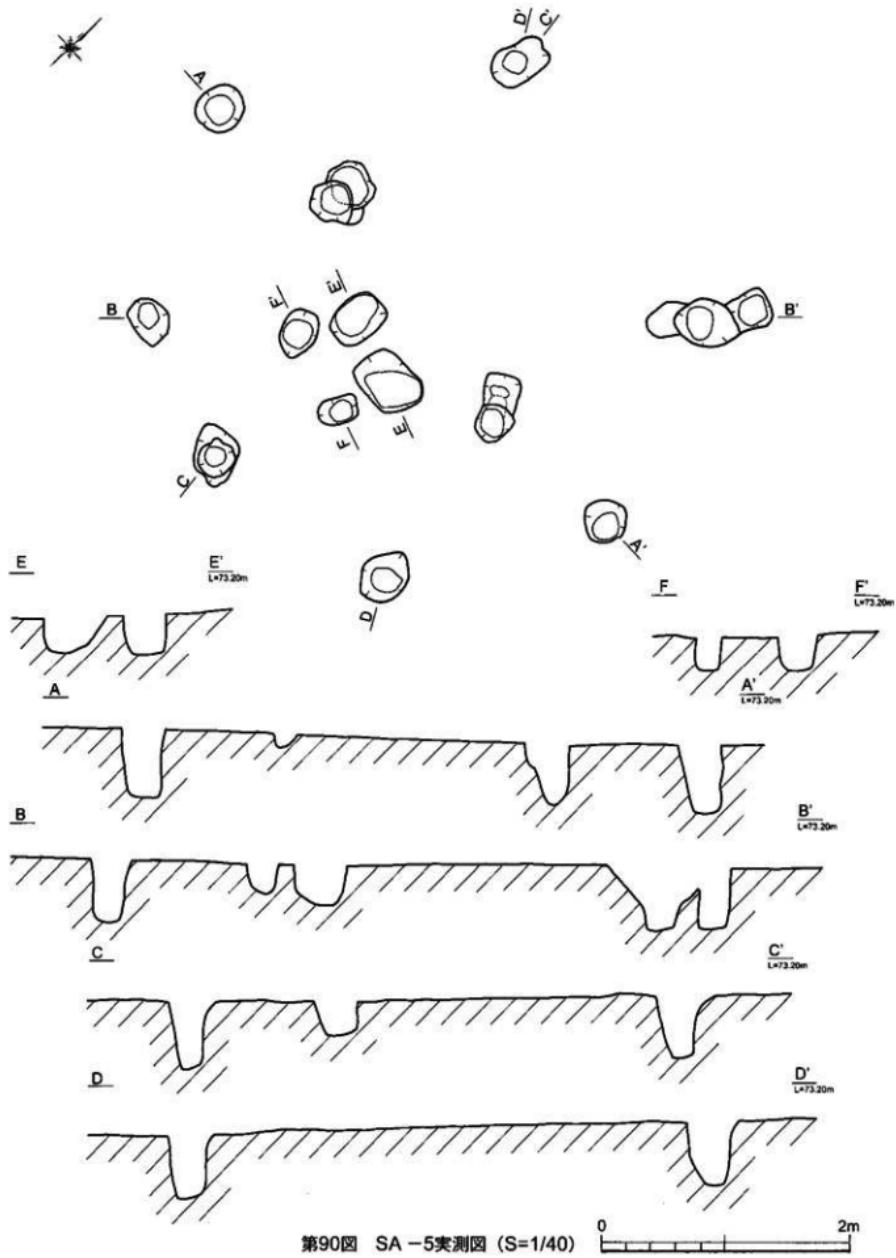
第88図 SA-3実測図 (S=1/40)



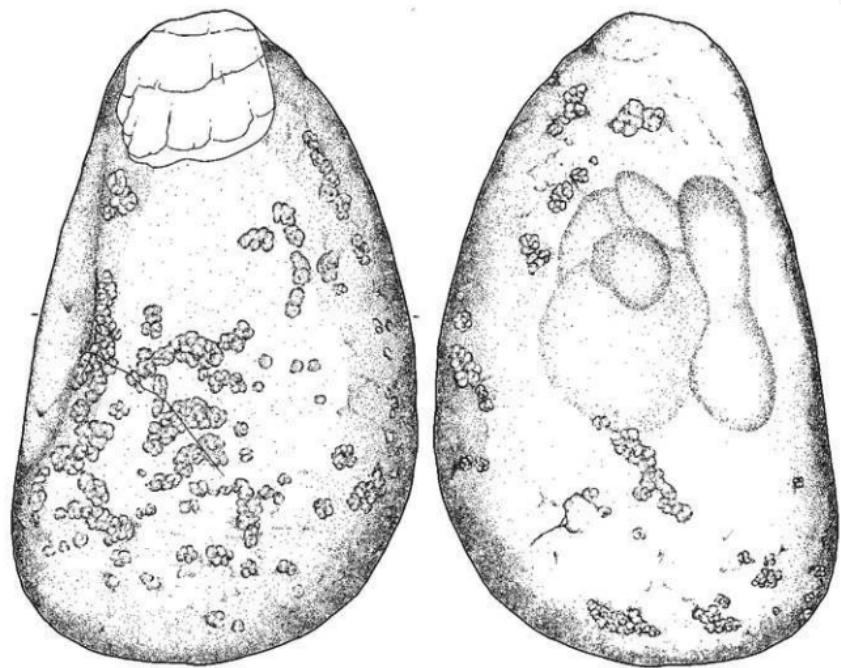
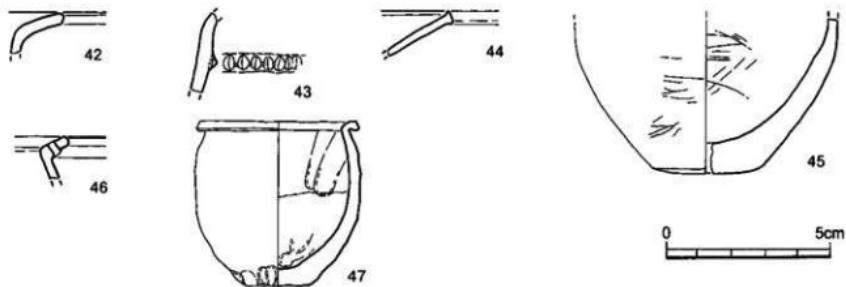
第89図 SA-4実測図 (S=1/40)

第16表 アカホヤ火山灰層上面調査出土土器観察表②

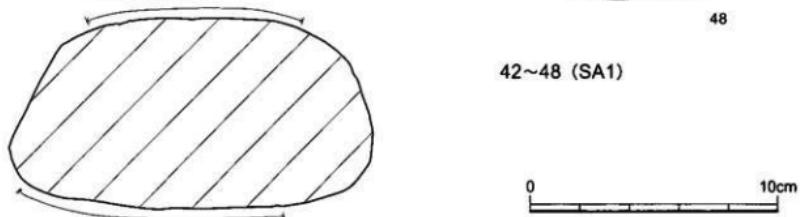
報告 No	出土 位置	器種	残存 部位	文様及び凹溝		色調	法蓋(cm)		備考	実測 No
				外面	内面		外側	内側		
58	土師器	口縁部	回転模ナデ	回転模ナデ	5YR7/4 にぶい楕	7.5YR6/4 にぶい楕				17
59	土師器	底部	回転模ナデ 回転ヘラ切り	回転模ナデ にぶい楕	10YR4/3 にぶい楕	7.5YR4/2 灰褐色				14
60	土師器	底部	回転模ナデ	花風の鳥 不明瞭	10YR7/4 にぶい黄褐色	7.5YR6/4 にぶい楕	(7.8)		反転復元	16
61	土師器	底部	回転模ナデ 回転ヘラ切り	回転模ナデ	7.5YR6/4 にぶい楕	7.5YR6/6 明赤褐色	(6.8)		反転復元	542
62	瓦器	底部	回転ナデ	回転ナデ	25YR5/1 黄灰	10YR5/2 灰黄褐色			反転復元	540
63	須恵器	胴部	格子目印き	同心円 当て具痕	5Y5/1 灰					532
64	須恵器	胴部	平行叩き	同心円 当て具痕	25Y5/1 黄灰	5Y6/1 灰				534
65	須恵器	胴部	格子目印き 後ナデ	平行當て具痕	25Y5/1 黄灰	5Y5/1 灰				536
66	須恵器	胴部	格子目印き	平行當て具痕	10YR5/2 黄灰	25Y5/1 黄灰				533
67	須恵器	胴部	格子目印き	車輪文	7.5YR5/1 褐灰	10YR5/1 褐灰				535
70	純文上器 鉢	胴部	ナデの後 くし書き文	ナデ	5Y5/1 灰	5Y5/1 灰				473
71	赤生土器 鉢	口縁部	模ナデ	ナデ	7.5YR5/4 にぶい楕	7.5YR6/4 にぶい楕				12
72	赤生土器 鉢	胴~ 底部	ミガキ、 黒焼あり	ナデ	7.5YR5/4 にぶい楕	10YR5/3 にぶい黄褐色	(6.2)		反転復元	541
73	赤生土器	胴~ 底部	ナデ	ナデ	5YR5/4 にぶい赤褐色	25Y5/1 黄灰				13



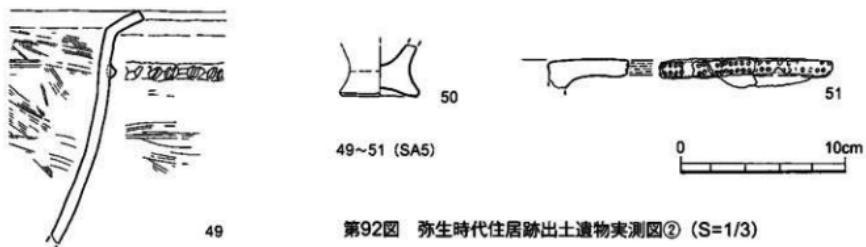
第90図 SA-5実測図 ($S=1/40$)



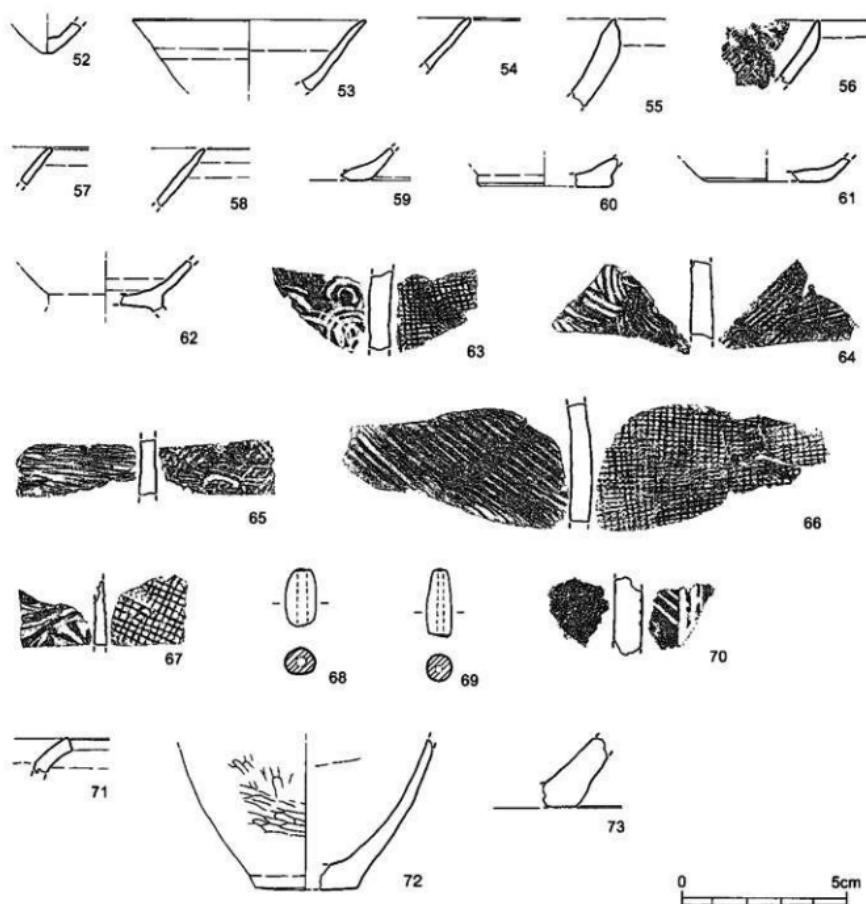
42~48 (SA1)



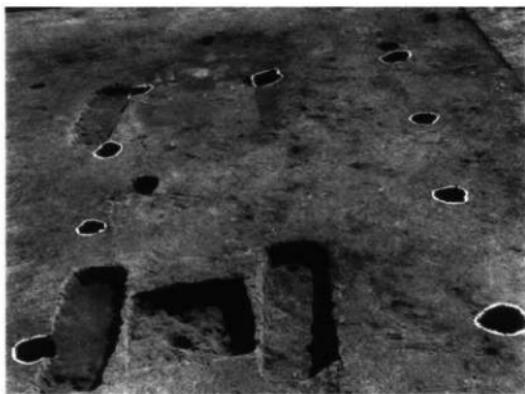
第91図 弥生時代住居出土遺物実測図① (S=1/3・1/2)



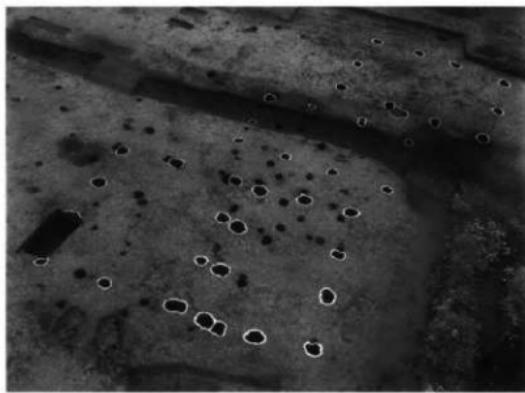
第92図 弥生時代住居跡出土遺物実測図② (S=1/3)



第93図 アカホヤ火山灰層上面調査出土遺物実測図 (S=1/3)



SB - 1

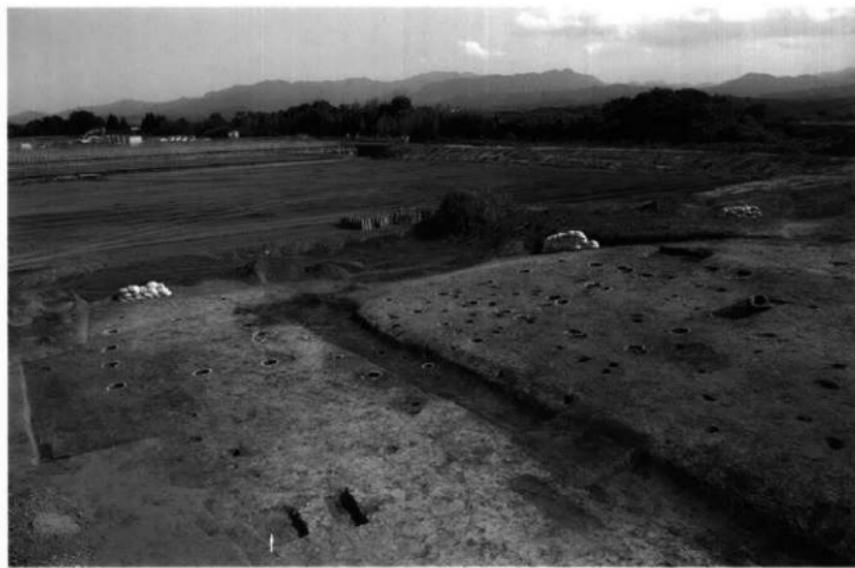


SB - 2~6

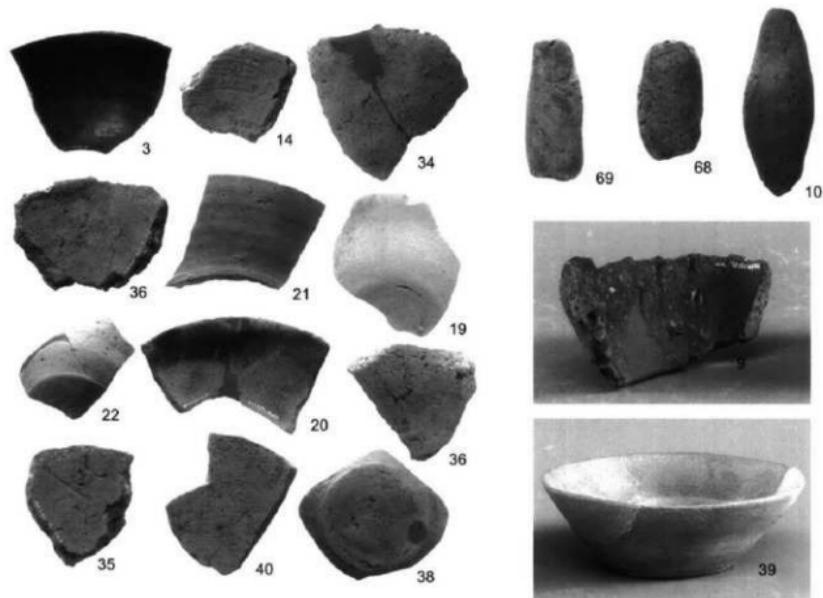


SB - 4

写真図版51 アカホヤ火山灰層上面検出遺構①



写真図版52 アカホヤ火山灰層上面検出遺構② (SB-2~6 北から)



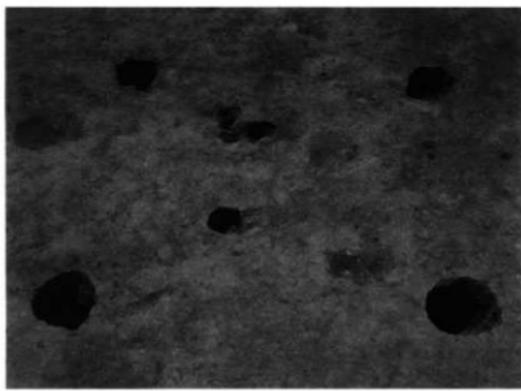
写真図版53 古代据立柱建物跡出土土器



SA -1

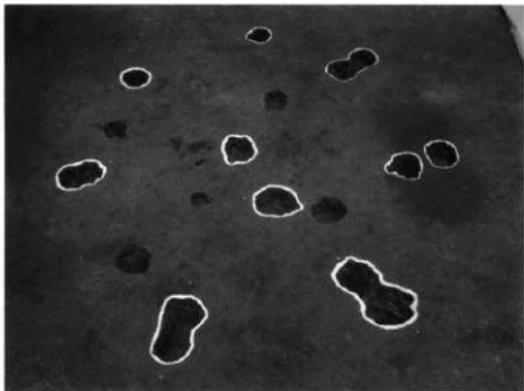


SA -2・3検出

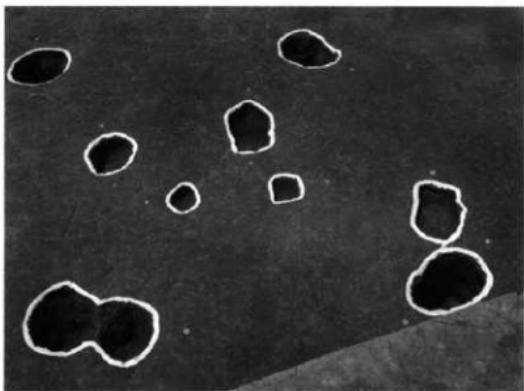


SA -2

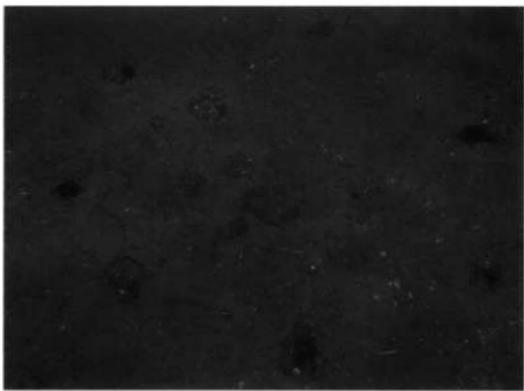
写真図版54 アカホヤ火山灰層上面検出遺構③



SA - 3

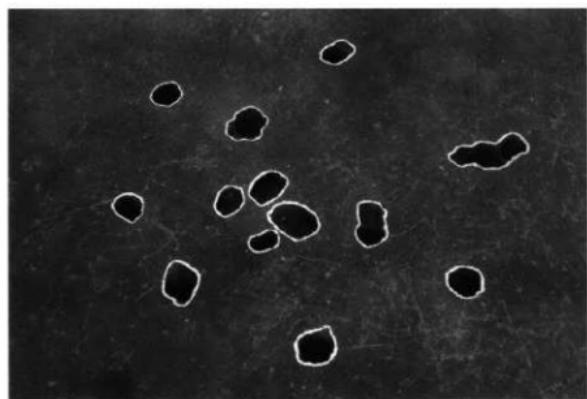


SA - 4



SA - 5検出

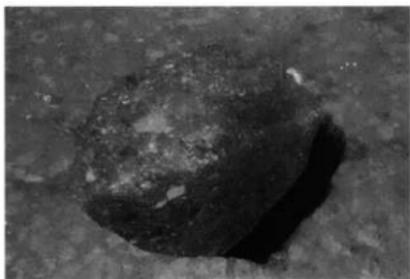
写真図版55 アカホヤ火山灰層上面検出遺構④



SA -5

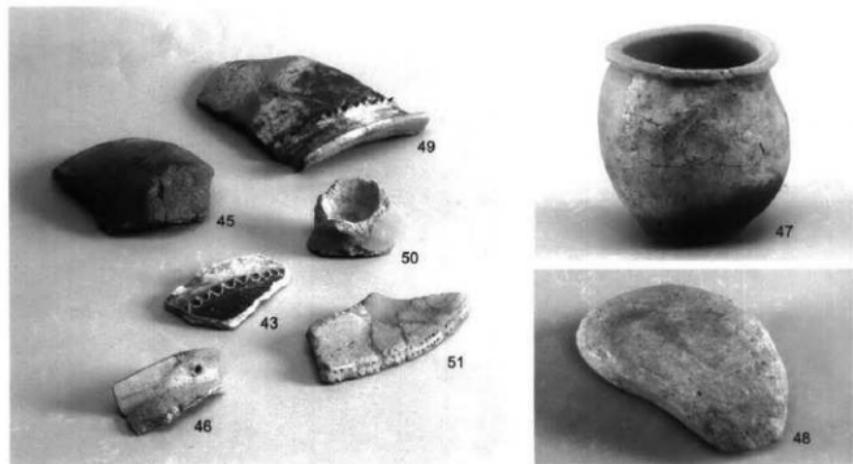


SA -5 柱穴掘①



SA -5 柱穴掘②

写真図版56 アカホヤ火山灰層上面検出遺構⑤



写真図版57 アカホヤ火山灰層上面調査出土遺物

第Ⅳ章 まとめ

縄文時代早期遺物包含層中の石器について

縄文早期の遺物包含層から出土した土器は貝殻円筒形土器、押型文土器、塞ノ神式土器が中心となっている。しかし貝殻円筒形土器及び押型文土器の分布には偏りがみられ、調査区全体に広がる土器は塞ノ神式土器だけである。石器の平面分布についても特徴的な傾向が見受けられた。以下に列举し、土器と石器の分布の重なりからいくつかの考察を述べていく。

- ① 桑ノ木津留産黒曜石製の石器及び石錐1・2類の分布が調査区の中央部付近に集中する。

調査区の中央部の土器の分布状況に注目すると縄文草創期の土器と貝殻円筒形土器、塞ノ神式土器の分布が集中している。

同台地上に所在する山田第1遺跡、山田第2遺跡では貝殻円筒形土器の分布が集中する箇所に桑ノ木津留産黒曜石製の石器の分布が重なるという傾向が見受けられている。その点に注目して本遺跡の桑ノ木津留産黒曜石製の石器の出土状況を検討すると草創期の土器及び塞ノ神式土器の分布にも重なるもののおおむね貝殻円筒形土器に伴う資料といつてはできるだろう。また石錐1・2類についても使用石材のほとんどが桑ノ木津留産黒曜石であることから同様の分布状況となっており、石錐1・2類も貝殻円筒形土器に伴うものであると考えられる。

しかし、近年調査のおこなわれた上猪ノ原遺跡第5地区の縄文草創期の堅穴住居跡からは桑ノ木津留産黒曜石製の石錐が出土している。本遺跡の桑ノ木津留産黒曜石製の石錐は草創期の土器とも分布が重なることから草創期の資料が混在している可能性は伺える。

- ② 石斧製作にかかる資料が調査区の中央部付近に集中する。

石斧製作にかかる資料は石斧（石斧片）及び石斧と同様の石材を使用する剥片である。剥片の中には研磨の痕跡が確認され、石斧の再加工の際に生じたものと考えられる資料も見受けられる。それらの資料の平面分布を観察すると2箇所の集中域がみられる。一箇所は調査区の中央部付近（仮に第1分布域としておく）でもう一箇所は調査区の北側の西端（第2分布域）に存在する。第2分布域のほうは土器の重なりがほとんどないが、第1分布域の資料については桑ノ木津留産黒曜石製の石器と同じ分布状況を示している。また国富町塚原遺跡の草創期の石斧と同じ石材を本遺跡の石斧製作にかかる資料も多用している。その共通性からも本遺跡において縄文草創期から貝殻円筒形土器の時期に石斧製作が行われたという可能性を考えることができる。

- ③ 石錐6類の分布が調査区の中央からやや南側付近に集中する。

石錐6類は素材剥片の形状を大きく残す資料で、調査区の中央からやや南側付近に分布が偏っている。土器の分布状況を確認すると調査区の中央部は前述のとおり塞ノ神式土器だけでなく貝殻円筒形土器の分布も確認されるが、中央部から南側については塞ノ神式土器の分布しか見られない。山田第1遺跡についても素材剥片の形状を大きく残す石錐は塞ノ神式土器と分布が重なる傾向がある。これらのことから石錐6類については早期後半に該当する資料と考えができるだろう。

古代の掘立柱建物跡について

掘立柱建物跡はいくつかの切り合い関係が認められているので数回の立替がおこなわれた可能性が伺える。しかし、出土遺物に大きな差は見られないため比較的短い期間に営まれた建物跡であると考えられる。建物跡からは他地域と比較ができるような須恵器や輸入陶磁器は出土しておらず、また出土遺物量自体も少ないため遺構の時期の検討は難しい。そのような状況ではあるが内黒の黒色土器の出土している点、やや内溝する口縁部の土師器壺などが出土している点から9世紀後半から10世紀にかかる建物跡と考えておく。

弥生時代の住居跡について

弥生時代の堅穴式住居跡については大部分が削平を受けている。そのため住居跡から遺物がほとんど出土しておらず集落の時期決定が困難な状況にある。検出された柱穴の配置状況から住居跡の形態は以下の3つに分類される。二本柱の住居跡で壁際に土坑を持つもの（SA-1）。四本の柱が方形に配置され、その中央部に2本の柱穴を持つもの（SA-2・4）。円形に柱が配置されその中央に二本の柱穴を持つもの（SA-3・5）。

SA-1は出土遺物と住居跡の形態から後期前葉に該当する住居跡といえる。そのほかの住居跡については柱穴の配置状況から発展松菊里型住居又は花弁型住居の可能性が考えられ、中期後半から後期に該当する住居跡と考えられる。この点はSA-5から出土している遺物を観察しても時期的な問題はなさそうである。

清武上猪ノ原遺跡（第1地区）における自然科学分析

株式会社 古環境研究所

I. 清武上猪ノ原遺跡（第1地区）における放射性炭素年代測定

1. 試料と方法

試料名	地点・遺構	種類	前処理・調整	測定法
No.1	第1地区, SI-4	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	AMS
No.2	第1地区, SI-31	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	AMS
No.3	第1地区, SI-39	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	AMS
No.4	第1地区, SI-43	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	AMS
No.5	第1地区, SI-55	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	AMS
No.6	第1地区, SC-2	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	AMS
No.7	第1地区, SC-7	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	AMS
No.8	第1地区, SC-8	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	AMS
No.9	第1地区, SC-16	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	AMS
No.10	第1地区, SC-17	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	AMS

AMS : 加速器質量分析法 (Accelerator Mass Spectrometry)

2. 測定結果

試料名	測定No	¹⁴ C 年代 (Beta-)	$\delta^{13}C$ (‰)	補正 ¹⁴ C 年代 (年 BP)	暦年代 (西暦) (1 σ : 68% 確率, 2 σ : 95% 確率)
No.1	209839	7830 ± 50	-27.3	7790 ± 50	交点 : cal BC 6630 1 σ : cal BC 6660 ~ 6560 2 σ : cal BC 6690 ~ 6480
No.2	209840	8250 ± 50	-26.0	8230 ± 50	交点 : cal BC 7290 1 σ : cal BC 7330 ~ 7160 2 σ : cal BC 7450 ~ 7390, 7370 ~ 7080
No.3	209841	9840 ± 40	-27.3	9800 ± 40	交点 : cal BC 9250 1 σ : cal BC 9260 ~ 9230 2 σ : cal BC 9280 ~ 9220
No.4	209842	8180 ± 40	-26.1	8160 ± 40	交点 : cal BC 7100 1 σ : cal BC 7180 ~ 7080 2 σ : cal BC 7300 ~ 7060
No.5	209843	7770 ± 40	-26.7	7740 ± 40	交点 : cal BC 6560 1 σ : cal BC 6610 ~ 6490 2 σ : cal BC 6650 ~ 6470
No.6	209844	9520 ± 40	-26.4	9500 ± 40	交点 : cal BC 8770 1 σ : cal BC 9080 ~ 9040, 8800 ~ 8740

2σ : cal BC 9120~9000, 8890~8880
8840~8710

No. 7 209845 8360 ± 40 -27.1 8330 ± 40 交点 : cal BC 7450, 7390, 7370
 1σ : cal BC 7480~7340
 2σ : cal BC 7510~7310

No. 8 209846 8260 ± 40 -26.4 8240 ± 40 交点 : cal BC 7300
 1σ : cal BC 7330~7180
 2σ : cal BC 7450~7400, 7360~7100

No. 9 209847 8310 ± 40 -25.3 8310 ± 40 交点 : cal BC 7430, 7420, 7350
 1σ : cal BC 7470~7320
 2σ : cal BC 7500~7290

No. 10 209848 8230 ± 40 -25.7 8220 ± 40 交点 : cal BC 7280, 7230, 7190
 1σ : cal BC 7320~7160
 2σ : cal BC 7340~7080

(1) ^{14}C 年代測定値

試料の $^{14}\text{C} / ^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在（AD1950年）から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は、国際的慣例により Libby の 5,568 年を用いた。

(2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C} / ^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比 ($^{13}\text{C} / ^{12}\text{C}$)。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (%) で表す。

(3) 補正 ^{14}C 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C} / ^{12}\text{C}$ の測定値に補正值を加えた上で算出した年代。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を -25 (‰) に標準化することによって得られる年代である。

(4) 曆年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動を校正することにより算出した年代 (西暦)。cal は calibration した年代値であることを示す。校正には、年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値、およびサンゴの U-Th 年代と ^{14}C 年代の比較により作成された校正曲線を使用した。INTCAL98では、約 19,000 年 BP までの換算が可能となっている。ただし、10,000 年 BP 以前のデータはまだ不完全であり、今後も改善される可能性がある。

曆年代の交点とは、補正 ^{14}C 年代値と校正曲線との交点の曆年代値を意味する。 1σ (68% 確率) と 2σ (95% 確率) は、補正 ^{14}C 年代値の偏差の幅を校正曲線に投影した曆年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の 1σ ・ 2σ 値が表記される場合もある。

文献

Suiver et al. (1998), INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration. Radiocarbon, 40, p.1041-1083.

中村俊夫 (1999) 放射性炭素法、考古学のための年代測定学入門、古今書院、p.1-36.

II. 清武士猪ノ原遺跡における樹種同定

1. はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質から、概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないとから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては、木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

2. 試料

試料は、集石遺構や土坑から採取された炭化材10点である。これらは、放射性炭素年代測定に用いられたものと同一試料である。

3. 方法

試料を割折して新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目）、接線断面（板目）の基本三断面の切片を作製し、落射顕微鏡によって50～1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

4. 結果

表1に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus ブナ科 図版1・2・3・4

横断面：年輪のはじめに大型の道管が1～数列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列もしくは散在する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。放射断面：道管の穿孔は單穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属コナラ節に同定される。コナラ属コナラ節にはカシワ、コナラ、ナラガシワ、ミズナラがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、高さ15m、径60cmぐらいに達する。材は強韌で弾力に富み、建築材などに用いられる。

ブナ科 Fagaceae

横断面：部分的ではあるが大型の道管が見られた。放射断面：放射組織は平伏細胞からなる。接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型のものが見られた。

以上の形質よりブナ科に同定される。ブナ科にはクリ、シイ属、コナラ属などがあるが、試料が小片で広範囲の観察が困難であることからブナ科の同定にとどめた。

ゴンズイ Euscaphis japonica Kanitz ミツバウツギ科 図版5

横断面：小型でやや角張った道管が単独ないし2～3個複合して散在する散孔材である。放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は20～30本ぐらいである。放射組織は異性である。接線断面：放射組織は異性放射組織型で、直立細胞からなる単列のものと、10細胞幅に及ぶ多列のものからなる。多列のものには不完全な鞘細胞が見られる。

以上の形質よりゴンズイに同定される。ゴンズイは関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する。落葉の小高木である。

シャシャンボ *Vaccinium bracteatum* Thunb. ツツジ科 図版6

横断面：小型で角張った道管が単独ないし2～3個複合して散在する散孔材である。放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は比較的少なく10本前後のものが多いが、単穿孔のものも認められる。道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は異性である。接線断面：放射組織は異性放射組織型で、直立細胞からなる單列のものと、5～8細胞幅で長い紡錘形を示す多列のものからなる。多列のものはほとんどが平伏細胞からなるが、上下縁辺部と側面部に直立細胞が見られる。

以上の形質よりシャシャンボに同定される。シャシャンボは関東南部以西の本州、四国、九州に分布する。常緑の低木または高木で、通常高さ1～5m、径10cmくらいであるが、大きいものは高さ10m、径70cmに達する。

5. 所見

当遺跡の集石遺構や土坑から採取された炭化材は、コナラ属コナラ節7点、ブナ科1点、ゴンズイ1点、シャシャンボ1点と同定された。最も多いコナラ属コナラ節は、日当たりの良い山野に生育する落葉高木であり、冷温帯落葉広葉樹林の構成要素であるミズナラやナラガシワ、および温帯に広く生育し二次林の性格を持つコナラなどがある。ゴンズイは林縁等に生育する落葉小高木である。シャシャンボも林縁等に生育する常緑の低木または高木である。いずれも、当時の遺跡周辺もしくは近隣の地域で採取可能な樹種であったと考えられる。

文献

佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞、木材の構造、文永堂出版、p.20-48.

佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞、木材の構造、文永堂出版、p.49-100.

島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧、雄山閣、p.296

山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成、植生史研究特別第1号、植生史研究会、p.242

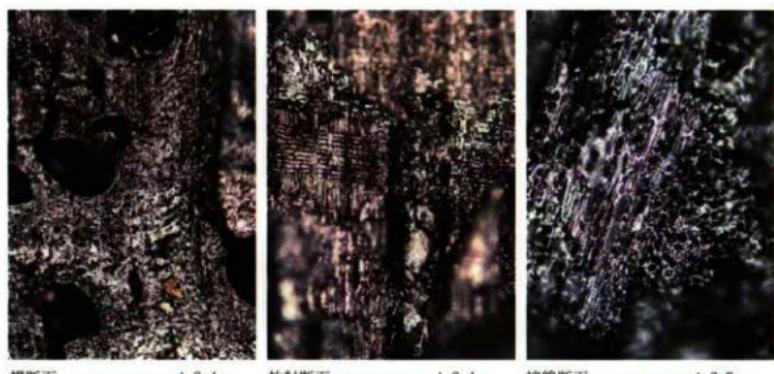
表1 清武上猪ノ原遺跡（第1地区）における樹種同定結果

SI - 4	<i>Vaccinium bracteatum</i> Thunb.	シャシャンボ
SI - 31	<i>Quercus sect. Prinus</i>	コナラ属コナラ節
SI - 39	<i>Quercus sect. Prinus</i>	コナラ属コナラ節
SI - 43	<i>Quercus sect. Prinus</i>	コナラ属コナラ節
SI - 55	<i>Euscaphis japonica</i> Kanitz.	ゴンズイ
SC - 2	<i>Quercus sect. Prinus</i>	コナラ属コナラ節
SC - 7	<i>Fagaceae</i>	ブナ科
SC - 8	<i>Quercus sect. Prinus</i>	コナラ属コナラ節
SC - 16	<i>Quercus sect. Prinus</i>	コナラ属コナラ節
SC - 17	<i>Quercus sect. Prinus</i>	コナラ属コナラ節

清武上猪ノ原遺跡の炭化材 I



横断面 放射断面 接線断面 : 0.4mm : 0.4mm : 0.2mm
1. 第1地区 SI-39 コナラ属コナラ節

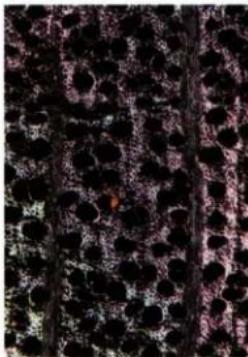


横断面 放射断面 接線断面 : 0.4mm : 0.4mm : 0.2mm
2. 第1地区 SC-2 コナラ属コナラ節



横断面 放射断面 接線断面 : 0.4mm : 0.4mm : 0.4mm
3. 第1地区 SC-8 コナラ属コナラ節

清武上猪ノ原遺跡の炭化材 II



横断面 ━━━━ : 0.4mm
4.第1地区 SI-55 ゴンズイ

放射断面 ━━━━ : 0.2mm

接線断面 ━━━━ : 0.2mm



横断面 ━━━━ : 0.4mm
5.第1地区 SI-4 A シャシャンボ

放射断面 ━━━━ : 0.2mm

接線断面 ━━━━ : 0.2mm

調査抄録

フリガナ	ヨツカガミイハル				
書名	清武上猪ノ原遺跡 - 1 -				
副書名	県営農地保全整備事業船引工区にかかる埋蔵文化財調査報告書				
巻次	第1集				
シリーズ名	清武町埋蔵文化財調査報告書				
シリーズ番号	第24集				
編集者名	井田篤・秋成雅博				
発行機関	清武町教育委員会				
所在地	宮崎県宮崎郡清武町大字船引204番地				
発行年月日	2008年1月				
所在遺跡名	所在地	市町村:遺跡番号	北緯	東経	調査期間
清武上猪ノ原 (第1地区)	清武町大字船 引字上猪ノ原	清武町:205	31° 52' 55"	131° 22' 12"	00.12.11～ 01.3.30 01.4.2～ 01.11.6
調査面積	調査原因	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
14,000m ²	農業関連	村落	縄文 (草創期・早期) 弥生 古代	集石遺構 炉穴 陥し穴状遺構 土坑 竪穴式住居跡 掘立柱建物跡 など	縄文式土器 土製品 石器 弥生式土器 土師器 など
特記事項					
塚ノ神式土器(深鉢)の埋設土器の検出。 完形の輪状耳栓の出土。					

清武町埋蔵文化財調査報告書 第24集

清 武 上 猪 ノ 原 遺 跡

- 1 -

県営農地保全整備事業船引工区にかかる埋蔵文化財調査報告書

発行年月日 平成20年1月31日

編集発行 清武町教育委員会

〒889-066 宮崎県宮崎郡清武町大字船引204

TEL 0985-85-1111

印 刷 小柳印刷株式会社

〒880-0803 宮崎市旭1丁目6-25

TEL 0985-24-4155 FAX 0985-24-1512

